

<教育講演 10>

パーキンソン病の認知機能障害の診方

河村 満¹⁾ 小早川睦貴¹⁾²⁾ 鶴谷奈津子¹⁾

(臨床神経 2011;51:861)

Key words : パーキンソン病, 認知機能, 情動

パーキンソン病 (PD) の主症状は運動症状であり, 認知機能には問題がないとされてきた。しかし近年では, 病期のごく初期 (あるいは病前) から感覚・認知・情動などの幅広い側面をふくめた認知機能障害がみられることが知られている。こうした認知機能障害は, 基底核～大脳皮質系の障害と, 中脳～辺縁葉系の障害に大別されるが, これらの認知機能障害を利用することにより, PD の病態を適切に把握するために役立つ。

認知機能障害を適切に評価することはいくつかの点で有益であると考えられる。まず, 一部の認知機能障害は PD の運動症状発現より前に生じることが知られており, これを早期診断に利用することが可能である。早期診断にとって広くもちいられているのが嗅覚性認知検査である。当科での検討においても PD 例の嗅覚検査成績は健常者より低下している。PD 例が示すのは嗅覚刺激の検出 (匂いがすると感じる) の問題だけでなく, 嗅覚検出が可能な PD 例において嗅覚性認知 (匂いが何であるかわかる) の成績が低下していることには留意が必要である。また, 表情認知のような情動認知課題も PD 例で低下がみられるが, PD の前駆病態とされるレム期睡眠行動異常症で成績低下がみられることも確認している。運動症状

の評価に加え, こうした認知機能検査を組み合わせることで, PD の診断精度を上げられる可能性がある。

PD において認知機能を測る第 2 の意義として, 日常生活への影響を把握するという点が挙げられる。この点はさらに, 認知症症状の評価とドパミン調節異常症候群の評価という点に分けられる。PD における認知機能低下は, 主として遂行機能や短期性記憶などのいわゆる前頭葉機能と関連が深いことが知られており, こうした機能の低下が日常作業の効率低下やミスなどを誘発する可能性がある。また, ドパミン調節異常症候群では, 病的賭博, 性的亢進, punding (物品をコレクションしたり, 棚の整理をしたりするなどの, ある行動の固執的な反復), 買い物依存, 摂食亢進など強迫的で衝動的な行動が生じる。こうした行動傾向の評価として, アイオワギャンプリング課題などの意思決定課題による評価が有用であると考えられる。また, 広く社会的認知機能を測る点で, まなざし課題などの心の理論課題が使用可能であるかもしれない。

PD 例の QOL の向上を視野に入れた治療をおこなうためには, 運動症状のみでなく, 認知機能障害を適切に評価することが重要と思われる。

Abstract

Assessment of cognitive and emotional functions in Parkinson's disease

Mitsuru Kawamura, M.D.¹⁾, Mutsutaka Kobayakawa, M.D.¹⁾²⁾ and Natsuko Tsuruya, M.D.¹⁾¹⁾Department of Neurology, Showa University School of Medicine²⁾Brain Science Institute, Tamagawa University

(Clin Neurol 2011;51:861)

Key words: Parkinson's disease, cognitive function, emotion

¹⁾昭和大学医学部内科学講座神経内科学部門 [〒142-8666 品川区旗の台 1-5-8]²⁾玉川大学脳科学研究所

(受付日: 2011 年 5 月 19 日)